

## 山内瑛姫の晩年（4）

— 一 柩の帰還と傘寿 —

第75回（昭和43年卒） 青柳明子

幕末から明治にかけての日本は激しい変動の最中であつたわけだが、その中で瑛昌院に関する事柄を附記しておきたい。

当時、秋田藩佐竹家にも山内家の女性が嫁いでいた。石川泰志「北国に嫁いだ山内家の姫君」（『土佐史談』）によれば「佐竹家には瑛昌院の父、山内豊熙の妹、悦が十八才の時、嫁いでいた。悦の夫、十一代藩主佐竹義睦は十九才。賑々しく行われた婚儀から一月後、悦を江戸に残し秋田に戻った直後の安政四年七月一日、水腫でこの世を去った」

悦は瑛姫にとっては叔母にあたる人で、瑛姫より一年前に結婚し、短い結婚生活の後に未亡人となつてしまった。

「未亡人となつた悦子は佐竹家や父山内豊資、藩主山内豊信から実家に戻り再婚をと勧められたが、一ヵ月の新婚生活で無常の別れとなつた夫義睦への貞節を守ると断言。落飾出家して諒鏡院と名乗った」（同前）

翌、安政5年（1858）に奇しくも同じ境遇となつてしまった瑛姫にも、同様の勧めがあつたようである。「酒井家では結婚後一年にも満たない内に若くして寡婦となつた瑛姫に、まだお若いことでもあり実家に戻り再婚されてはどうかと勧めた。しかし瑛姫は女がひとたび嫁して後、夫に死なれたからといって他家に再び嫁ぐことはできない。貞婦二夫にまみえずの教えを守り抜く旨応え、酒井家に残り夫忠恕（ただひろ）の菩提を弔う決意を示した」（同前）

山内家から北国の藩主家に嫁いだ二人の女性が、それぞれに強い思いで同じ道を選んだ。しかし、戊辰戦争（慶応4年 1868）の折、秋田藩と庄内藩は新政府側と奥羽越列藩同盟側に分かれて争うことになる。後に檜物町邸で交代に宿直（とのゐ）を務めることになる志賀清任（しがきよとう）、三好森兵衛（みよしもりべえ）もこの戦いに参加していた。

『新編庄内人名辞典』によれば、志賀清任は天保14年（1843）2月3日生まれ、三好森兵衛も同年2月29日生まれなので、天保12年生まれの瑛昌院の2歳年下の同年である。志賀清任（金兵衛）は武術に優れていた。慶応3年に平向良蔵からイギリス式の調練を学び（「荘内幕末史」）、翌4年8月に西洋調練教示方を命じられ（「老いの友」）、9月に大山組農民隊を率いて、越後境の越沢に出陣した。明治5年（1872）、新潟鎮台新発田分営に入隊したが、8月に帰郷して、松ヶ岡開墾に参加した。

三好森兵衛ははじめ致道館に学んで俊才の評があり、後に選ばれて助教兼典学同様となる。慶応4年（1868）戊辰戦争に出陣、秋田口に進んで功あり恩賞を受け、明治5年松ヶ岡開墾に参加した。また「詩文章に長じて徂徠学の他に陽明学に造詣深く、菅実秀の推挙によって旧藩主酒井忠篤および側近のため講書の役を命ぜられ、伝習録などを講じた。（中略）明治27年（1894）52歳のとき、旧藩世子忠恕未亡人瑛昌院付となり、終生檜物町の南御殿に勤務した」（同上）

また三好森兵衛は「三好廉」ともいい、明治43年に編纂された「酒井家世紀」の編者でもあつた。本稿にも各所に参照、引用している史料である。三好森兵衛（廉）は檜物町邸の宿直の傍ら、酒井家家譜の調査執筆を続けたのだろう。彼の死後、檜物町邸の宿直部屋に残された大量の書物は、その研鑽の証であり人となりであると感じる。

このように清任は武の人、森兵衛は文の人の特徴があるが、両名とも文武と人格に優れていたもので、後に瑛昌院に仕えることとなつたのであろう。

大正9年（1920）、瑛昌院は80歳、傘寿の御祝いをするようになっていた。ただ「忠悌日記」の3月31日の項には「母上様昨日より神経痛の為、御足痛御臥床、六日と定めし御内祝も如何すれば良きや」とある。傘寿の御祝いは、喜寿の時のような盛大なものではなく「御内祝」として、内輪で祝うことにしてあったらしい。翌日には症状が増悪し「母上様の神経痛、今日に至り両足となる。午後良齋拝診、御薬を用ふ」となった。

そのような事情なので、80歳の御祝いは日延べになった。症状が軽快したのは2週間後くらいからで、4月17日の日記には「母上様、一両日前より神経痛御快く御一人にて便所へ御出できる」とあるので、一番痛んだ時は便所へ行くにも人から支えて貰うほどであったらしい。

4月19日、菅実が檜物町邸を訪れた。「母上様へ御墓（今回御改葬の御墓）に付、申上置」のが用事であった。東京芝清光寺に葬られていた8代目藩主の酒井忠温（清光院）と瑛昌院の夫君、酒井忠恕（賢明院）のお墓を鶴岡大督寺の墓所に改葬することになったのである。酒井忠温（さかいただあつ）は明和3年（1766）5月、35歳の時に8代目の家督を相続して庄内藩主となったが、性病弱のため、相続後わずか8ヶ月で逝去した。36歳であった。1月16日という冬の最中であったせいか、江戸芝清光寺に葬られたのである。同じく酒井忠恕も、高橋種芳の「編年私記」によれば「賢明院様御尊骸、大督寺へ御葬埋之儀御願可被成之処、最早当年者深雪ニ而御道中御差支ニ付、江戸表清光寺へ御葬埋と」なったことが記されている。

5月5日「午後一時より清光院様、賢明院様の御墓御取除に付、報告祭の如きもの行はせらる」と日記にあり、5月14日には改葬準備工事がはじめられた。同じ頃、東京の清光寺の御墓発掘の陣頭指揮をとるため、忠悌のすぐ上の兄・忠孝（ただもと）が、菅実他数名と上京した。5月18日に忠孝から電報で「ケサニジ ブジゴハツクツスム」と知らせがあり、柩は19日に出発、21日に鶴岡へ着くということであった。5月20日、雨天で延び延びになっていた大督寺墓所の草取りを、総勢50名ほどの人数で行い、受け入れ準備は整った。

5月21日午前11時過ぎ「清光院様御始、御柩、鶴岡駅到着」となり、但しその日は一同、柩を拝したのみで、午後から墓石などを大督寺へ運び、柩の移動は慰霊祭のある翌日となった。「翌日午前五時より馬車へお乗せ申す事に依りて、同時迄同駅へ集まるべし。明日も晴天らしく誠に幸いなり」

5月22日はいよいよ御霊柩を大督寺に運び、祭を執行する日である。忠悌は前日の打合せに従い、午前5時に鶴岡駅に赴いた。途中で昨夜半から柩の護衛をしていた人々と行き会った。「午前六時過ぎより御柩を馬車に移す。案外易く所用時間わずかに一時間足らず。依りて余程早きにより、一時間休み、八時二十分発車。九時十分大督寺御着。馬車より下し申しゴロにて祭場へ御入。十一時半頃より祭執行、終りて直に御埋葬。本日は晴天なりしを以て実に万事好都合」と日記にあるように、万事スムーズに行われた。

柩が大督寺の門に差し掛かったとき、門前には「松原叔父様（酒井忠宝）、叔母様、母上様其の外皆々様」が出迎えた。瑛昌院はその一週間くらい前まで、風邪で喉が痛み、微熱もあったのだが、養生して回復し、無事に柩を出迎えることができた。

山内瑛姫として輿入れしたのが安政5年6月。夫君忠恕（ただひろ）はわずか5ヶ月にも満たない結婚生活の後、妻を残して同年11月5日に20歳を一期として彼岸の人となった。幼いころの重患もあり、また安政2年にも「正月十四日、若殿様御不快御快然御床払。去年中より余程之御病氣被成候由之処、今日御快然御床払被遊」（高橋種芳「編年私記」）とあるのを見れば、総じて頑健とは

言い難い体質であったかもしれないが、「賢明院」の諱が示すように、聡明な人柄であったのではないだろうか。瑛姫は酒井家に残り、瑛昌院と名を改め、忠恕の菩提を弔う道を選んだ。

その後、武家社会は終焉を迎え、瑛昌院は時代の大きな変化に翻弄されつつ、鶴岡に居を定め数え80歳を迎えたのである。

5月31日、瑛昌院は忠悌と共に大督寺墓所を訪れ、60年の時を隔てて、ようやく妻の近くの奥津城で眠ることになった賢明院忠恕の墓に参拝した。その後、家中新町邸での恒例の昼食会に出て、午後に檜物町邸に戻った。この日もまた晴天であった。

6月6日、延び延びになっていた瑛昌院の80歳の内祝いについて、忠悌は菅実と相談し「御祝は来る十日と決定」した。内祝いなので、喜寿の時のような引出物は用意せず、祝宴のみとした。

6月10日は晴れた。「午前十一時より菅実来り、色々あっせん。五時前より松原叔父様を始め、皆々様御出。なかなか盛会なり」（「酒井忠悌日記」）

その4日後の6月14日、日記には興味深い記事が綴られている。

「午後より母上様御歌書あり。午後四時過ぎより墨及硯を返へしかたがた、加宅々に行き、御祝の御歌を送る」

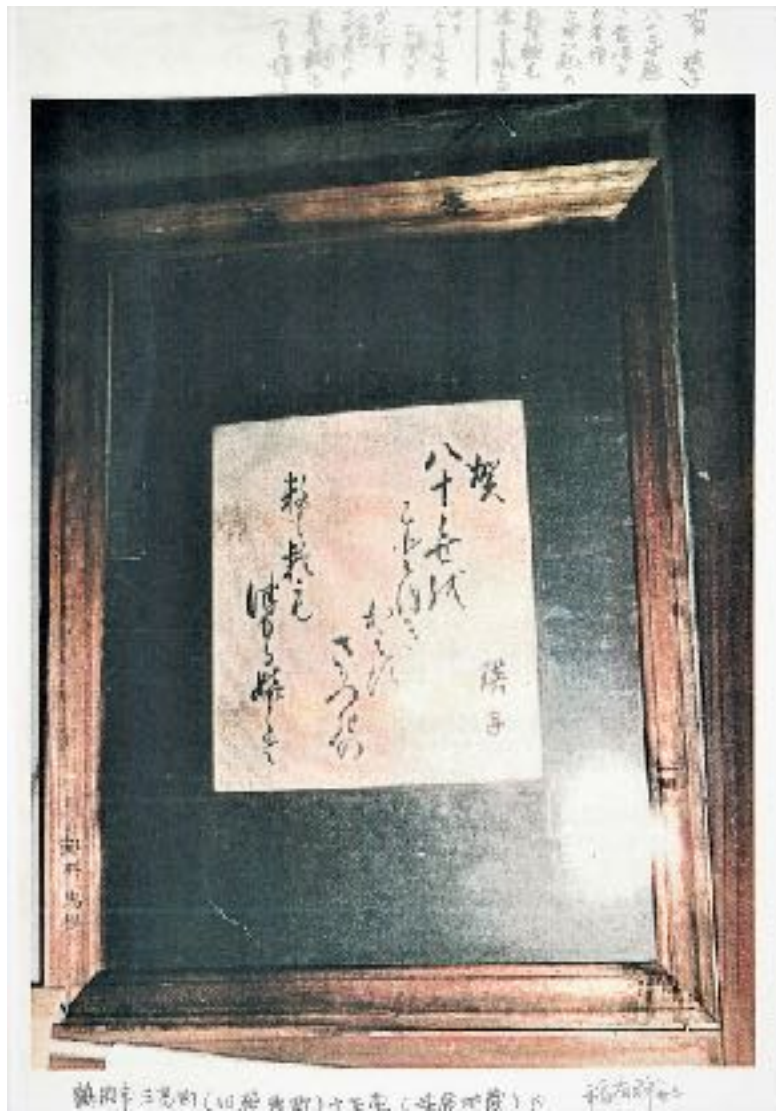
この記述によれば、この日、瑛昌院は「御歌書」をされた。それは4日前の傘寿の内祝いの折の感慨を表した書であることは間違いない。面白いのはその次の「墨及硯を返しかたがた、加宅々に行き」のくだりである。加宅は加藤宅馬のことであろう。彼は『新編庄内人名辞典』によれば「嘉永3年（1850）6月生 早くより学問に長じて詩文章に秀でた。明治3年、旧藩主酒井忠篤に随従して鹿児島に赴き、西郷南洲の教えを受けて練兵に参加した。（中略）華族令の施行に伴い伯爵家となった酒井家の家令に選ばれ終生、その職にあった。」

加藤宅馬は瑛昌院より10歳年下の、ちょうど70歳であった。忠悌日記によれば、この宅馬翁は自分の家の招待会などでは、必ず参加者に「寄せ書」として一筆求める癖（へき）があったらしい。推測ではあるが、瑛昌院の御祝いの席上、宅馬翁は「瑛昌院様の御長寿にあやかりたいので、私の墨と硯をお用いになって、御歌を一つ頂ければ、誠にありがたきごどでがんすがのう」などと申し上げ、瑛昌院も笑ってそれを諾うといった一幕があったのかもしれない。つまり宅馬翁は自分の墨と硯をカタに置くことで、瑛昌院が約束を反故にしにくい状況を作ったのではないだろうか。そして、おそらくこの日に書かれた色紙のうち一枚が、鶴岡市三光町の十王堂の長押に今も掛けられている和歌だと思われる。

加藤宅馬翁の微笑ましい作戦に感謝したい。

さて、その色紙である。はじめの行に「賀 瑛子」とあり、流麗でバランスの美しい書である。しみじみと澄んだ明るさを感じる。原文は変体仮名文字なので、読みやすくしたものを記す。

八十とせ（歳）を ことほぎかはす（寿ぎ交わす）さかづき（盃）の  
数も齢（よわい）も つもる嬉しさ



写真撮影 中西節氏  
—この項終り—